

# 「国語Ⅰ」と「現代語」をつなぐ指導の工夫

— 単元「詩を読む」の指導を中心に —

山本 伸子

## 1 はじめに

新指導要領では、音声言語の指導の重視がうちだされ、選択科目「現代語」の内容としても取り上げられている。話し方や音読、朗読指導を行う場合、それが、読解、鑑賞の指導とは遊離した、テクニクだけの指導になつてしまつては、総合的な国語の学力を身につけさせることは難しいと考えられる。そこで、「国語Ⅰ」の学習指導の工夫として、単元「詩を読む」の中で読解、鑑賞の指導と、朗読という表現活動をからめることにより、より深い理解と、表現の喜びを身につけさせたいと考えた。また、一年生一学期にこの単元を実施することにより、生徒同士が、お互いの声に耳をかたむけ合う伸び伸びとした教室づくりをしたいと考え、指導を試みた。

## 2 単元のねらい

- (1) さまざまな詩教材をとおして、「生」の意識について考えさせる。
- (2) 詩を鑑賞（理解）することと、朗読（表現）することの結びつきについて考えさせる。
- (3) 詩の朗読に取り組むことにより、詩の表現を読み味わい、感性を磨くとともに表現力を豊かにさせる。
- (4) 生徒同士で朗読を聞きあつたり、相互評価をしたりにすることにより、お互いを認めあえるような伸び伸びとした教室づくりをする。

## 3 教材

- (1) 茨木のり子「生まれて」（筑摩書房『国語Ⅰ』）
- (2) 谷川俊太郎「空の青さをみつめている」（中央公

論社「現代の詩人9 谷川俊太郎」

谷川俊太郎「地球へのピクニック」(同右)

(3) 宮沢賢治「永訣の朝」(筑摩書房『国語I』)

(4) 茨木のり子「言の葉さやげ」より「語られる言葉

としての詩」(花神社「言の葉さやげ」茨木のり子)

(5) 峠三吉「八月六日」(ほるぶ出版『日本の原爆文学

13 詩歌」)

(6) 佐藤春夫「秋刀魚の歌」(中央公論社『日本の詩歌

16 佐藤春夫」)

(7) 「朗読のすすめ」(東京書籍『現代語』)

(8) 「朗読譜の記号」(明治図書『群読の授業』高橋俊

三)

(9) 高村光太郎「レモン哀歌」(筑摩書房『国語I』)

(10) 中原中也「一つのメルヘン」(東京書籍『現代語』)

(11) 三好達治「わが名をよびて」(同右)

(12) 草野心平「秋の夜の会話」(同右)

(13) 谷川俊太郎「いるか」(同右)

#### 4 単元の指導の実際

##### 第一時

①今までに習ったことのある詩をあげさせ、  
感想を述べさせる。

②「生まれて」の本文の理解と詩の鑑賞。

第二〜三時①「生まれて」本文の理解と詩の鑑賞。

##### 第四時

②谷川俊太郎「空の青さをみつめていると」  
「地球へのピクニック」の範読と鑑賞。  
「I was born」を中心とする「生  
まれて」本文の理解と詩の鑑賞。

##### 第五時

宮沢賢治「永訣の朝」の理解と鑑賞。

##### 第六時

茨木のり子「語られる言葉としての詩」の  
中でどのような朗読が望ましく、どのような  
朗読が望ましくないと述べられているか話し  
合わせた。その結果、詩の朗読に習練は必要  
で、作者と読み手の個性のぶつかり合いだけ  
に重点が置かれたり、読み手だけが感動して  
自分の感情を出しすぎるのはよくないという  
結論が得られた。

##### 第七時

茨木のり子が「語られる言葉としての詩」  
の中で佐藤春夫「秋刀魚の歌」、峠三吉「八月  
六日」を同じ「泣き」の朗読のし方で読んで  
はいけないと述べている理由を、実際に二つ  
の詩を読ませ、話し合わせた。

「生徒たちの意見」(話し合い後の生徒のノート  
より主なものを抜粋)

・佐藤春夫「秋刀魚の歌」の場合  
孤独の寂しさ。

自分の理想どおりに事が運ばない辛さ。

複雑な人間関係と感情。

自嘲的。

個人的な問題。

惨めで寂しいことが泣きの主体。

なまけなさを含んだ哀切、孤独。

・峠 三吉「八月六日」の場合

激しい怒り。

憎しみを抑制して、客観的に表現しているの

で、よけいに強まっている。

人間存在と国家に対する怒り。

人間の根底に関わる生と死の問題。

戦争の厳しき、悲惨さを訴えている。

家族全てを奪われた絶望感。

## 第八時

①「朗読のすすめ」の理解。

## 第九時

②「朗読譜の記号」の理解。

自分の好きな詩を前述の「3教材」から一つ選ばせ、「朗読譜」を作らせた。あらかじめ「資料1」、「資料2」のようなプリントを、教材の項であげた詩ひとつずつについて作っ

て配布し、詩の行間に朗読譜の記号を書かせ、さらに自分がなぜそのように朗読したいのか

という理由を詩の下の空欄の中に書かせた。

これによって生徒の詩の読解、鑑賞と朗読が

むずびつくように工夫したわけだが、自由に

書かせたため、自分の感想を書き込んでし

まったものや、理由が一つ一つの朗読譜記号に即していないものもみられた。

生徒の選んだ詩は次のとおりである。

一年三組 一年八組

「空の青さを見つめていると」 0名 1名

「地球へのピクニック」 1名 0名

「I was born」 0名 4名

「レモン哀歌」 12名 13名

「一つのメルヘン」 4名 6名

「わが名をよびて」 1名 0名

「いるか」 3名 1名

「秋の夜の会話」 11名 10名

## 第十時

①一クラスから六〜七名の者を選び、自分の作った「朗読譜」のプリントを見ながら、

全員の前で朗読させた。

②その他の生徒には、朗読評価カード「資料4」参照を配布し、朗読を聴きながら記入させた。

③朗読者全員の朗読が終わった時点で、朗読者の感想を言わせた。全員の評価カードを回収し、朗読者に見せた。

5 生徒の「朗読譜」を比較して

—「レモン哀歌」の場合—

(「」内はその朗読譜記号をつけた理由。朗読譜記号については「資料3」を参照のこと。)

ア

かなしく白くあかるい死の床で (F・G君)  
「自分一人のさびしい病室の様子をはつきり浮かび  
上がらせるため、弱く間をあける。」

かなしく白くあかるい死の床で (M・Yさん)

「暗くならないように。(死を明るくとらえている感  
じ。)」

かなしく白くあかるい死の床で (A・Sさん)

「遠くを見るような感じで読む。智恵子の死を静か  
に思い出しているから。」

かなしく白くあかるい死の床で (Y・Jさん)

「一つ一つの言葉を強めるため。」

イ

ぱつとあなたの意識を正常にした。(F・G君)

「レモンをかんだ瞬間をスピード感をふまえて表現  
する。」

ぱつとあなたの意識を正常にした。(M・Y君さん)

「一瞬というか速さを表したい。」

ぱつとあなたの意識を正常にした。(A・Sさん)

「うれしそうに読む。作者にとつてこれが唯一の幸  
せだったから。」

ぱつとあなたの意識を正常にした。(O・Mさん)

「ぱつという音の感じを出したいから。」

ウ

生涯の愛を一瞬にかたむけた

「光太郎の感動と二人の愛をゆっくりと読んで表現  
する。二人が幸せを感じる時を表現する。」

智恵子はもとの智恵子となり (M・Yさん)

生涯の愛を一瞬にかたむけた

「智恵子の意識が正常になった。↓今までの愛をも  
う一度確認。」

智恵子はもとの智恵子となり (A・Sさん)

生涯の愛を一瞬にかたむけた

「もとの智恵子になったのが作者はうれしかったか  
ら。」

智恵子はもとの智恵子となり (K・Y君)

生涯の愛を一瞬にかたむけた

「最後に生涯の愛をかたむけてくれた智恵子に感謝し、感動している場面だから。」

(気づき)

アの部分に間を取る朗読譜の記号をつけたものは二十五名中十八名であった。理由としては、(F・G君)、(M・Yさん)、(A・Sさん)にみられるように、病室のイメーჯや光太郎の気持ちに即したものが中心であったが、中に(Y・Jさん)のように単に言葉の面だけからというものもあった。イの部分もほとんどの生徒が「ぱっと」の部分に何らかの記号をつけていた。とくに目だったものは、プロミネンスをつけることによつて、スピード感や光太郎のうれしさを表そうとしているものである。ここでも(O・Mさん)のように、言葉の感覚のみから、記号をつけているものがみられる。ところが、ウの部分では、二十五名全員が、強く読むやプロミネンスなどの記号を用いて、強調して読もうとしている。そして、その理由が全て詩の内容や光太郎の感動を表すためと考えられているのが特徴である。

6

朗読評価カード分析を通して

—「レモン哀歌」の場合—

(F・G君)、(M・Yさん)の朗読を聴いて書いたクラス全員の朗読評価カードを、項目毎に分類し、考察を試みた。項目毎の分類表は「資料5」のとおりである。(F・G君、M・Yさんの朗読譜は「資料1」「資料2」を参照のこと。)

(気づき)

(F・G君)は、文節ごとに間を取り、ゆっくり朗読することにより、死の重さ、光太郎の悲しみを表現しようとしていたが、聞き手の生徒もこの点を聞き取っていたことがわかる。(M・Yさん)は逆に、語尾を全体的にあげ、上がり気味のイントネーションをつけることにより、かなしみの中にも爽やかで、明るい愛情の存在を意識して朗読している。聞き手もこの点を特に意識していることがわかる。しかし、(M・Yさん)は実際の朗読で朗読譜で考えた箇所以外でも、イントネーションを上げてしまったところがあり、聞き手の生徒の評価として、「イントネーションが少し変だ。」という指摘が上がってきたと考えられる。また、(F・G君)が特に情感を込めて読んだ「かすかに」という言葉、(M・Yさん)

## 7 反省と課題

がプロミネンスと速さを工夫した「ぱっと」という言葉は、いずれも聞き手の生徒の評価を得ており、聞き手の生徒は、全体の印象だけでなく、語句のレベルでも朗読者の読みをとらえていることがわかる。また、聞き手の生徒は、朗読者の朗読譜を見ながら聞いているのではないにもかかわらず、朗読にあらわれた朗読者の読みと自分の読みとの違いを意識していることが考えられる。

### (1) 前半の「生まれて」、「永訣の朝」では、読解、鑑賞の授業を教師の発問と生徒の応答を中心とする一斉授業の形で進めたが、「かなしみ」、「芝生」の詩を通じて第二の誕生としての自我意識の芽生え、また茨木の言うところの「忘れもの感覚」を意識させることができた。

(2) 吉野 弘「I was born」を紹介した部分は「生まれて」と切り離れた形で、詩そのものの鑑賞に焦点をあてた。白のイメージから『蛭の卵』僕の肉体』、『蛭の母』を浮き上がらせていくことにより、イメージを膨らませて、読解させることはできたと思うが、散文詩としての表現効果にまでは言及することはできなかった。

### (3) 茨木のり子『言の葉さやげ』の中の「語られる言葉としての詩」を導入することにより、茨木のり子「生まれて」と後の詩の朗読に関する内容の部分をスムーズに繋ぐことができた。また、「語られる言葉としての詩」から、望ましい詩の朗読のありかたを考えさせることにより、生徒自身による詩の朗読が、詩の読解、鑑賞から大きくずれたものになることを防ぐことができた。

### (4) 峠 三吉「八月六日」、佐藤春夫「秋刀魚の歌」は、読み比べるべき詩ではないかもしれないが、「語られる言葉としての詩」の中で触れられているのであえて取り上げた。この詩に関する話し合いを通して、詩の全体的な雰囲気や内容と、朗読とのかかわり方が考えられたのではないか。また、峠 三吉「八月六日」は二学期に学習する予定の「黒い雨」への導入の意味も兼ねている。

(5) 朗読譜をつくらせたとき、詩のプリントの下方に枠を作って、その朗読譜記号をつけた意味、理由を記入させたのが今回の工夫の一つである。朗読のしかたの根拠に、自分なりの詩のイメージや詩の内容の理解、言語感覚があることを自覚させることはできた。しかし、詩の理解の深さ＝朗読のうまさとはならないのは当然であって、この間に朗読譜をおくことによって、その生徒なりの理

解の、実際の朗読にはあらわれてこない部分を知ることができる。

(6) 一年三組は発表と同じ時間内に別室で練習させてから発表、一年八組は発表の前日に、提出させていた朗読譜を返却し、発表者を指名して練習させてから発表させた。全体として、朗読の技術はあまりかわらないが、一年八組のほうが朗読譜に忠実に読めていた。

(7) 朗読評価カードによって相互評価を試みたが、聞き手の生徒は発表者の朗読譜を見ながら聞いているのではないにもかかわらず、全体の声の大きさ、強弱、イントネーションだけでなく、語句レベルの読み方の工夫も聞き取ることができている。また、自分の読みや解釈との違いも意識していることが分かった。

(8) 聞き手の生徒一人一人の評価では、むらやゆれがあるが、全員の評価項目に関する表現を見渡してみると、共通性が見られ、ほぼ妥当な評価になっていると思われる。この意味では、一対一の相互評価よりは、一人の発表者に対して、全員で評価するほうがよいのではないかと思われる。

(9) 単元のねらいから考えると、読解、鑑賞の授業を行った詩に関してのみ、朗読をさせたほうがよかったかもしれないが、朗読の表現が画的にな

る恐れもあり、生徒に自由な読みをさせたほうが生き生きと朗読に取り組めるのではないかと考えて、読解、鑑賞の授業を行わなかった詩も朗読の選択対象に入れた。

(10) 単元全体のまとめから考えると、取り上げる詩のテーマを揃えるとか、もつと詩の表現のしかたや言葉そのものに焦点をあてた読解、鑑賞の授業を行うほうが単元後半の朗読の授業に密接に結び付くと思われるので、今後工夫してみたい。

(香川県立高松高等学校)

レモン哀歌

1 そんなにもあなたはレモンを待っていた  
 2 かなしく、白くあがる、い死の床で  
 3 わたしの手からとった一つのレモンを  
 4 あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ  
 5 トリブズいろの香気が立つ  
 6 その数滴の天のものなるレモンの汁は  
 7 ばつとあなたの意識を正常にした  
 8 あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑う  
 9 わたしの手を握るあなたの力の健康さよ  
 10 あなたの咽喉に嵐はあるか  
 11 こういふ命の瀬戸きわだ  
 12 智恵子はもとの智恵子となり  
 13 生涯の愛を一瞬にかたむけた  
 14 それからひと時  
 15 昔山嶺でしたような深呼吸を一つして  
 16 あなたの機関はそれなり止まった  
 17 写真の前に挿した桜の花かげに  
 18 すすしく光るレモンを今日も置こう

高村光太郎

高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

1 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

2 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

3 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

4 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

5 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

6 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

7 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

8 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

9 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

10 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

11 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

12 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

13 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

14 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

15 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

16 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

17 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。

18 高村光太郎の朗読譜。楽譜は縦書きで、音階線とリズム記号が用いられている。楽譜の右側には、各小節の日本語の歌詞が縦書きで記されている。楽譜の左側には、いくつかの注釈や補足が記されている。



[資料2] M・Yさんの朗読譜

### レモン哀歌

高村光太郎

そんなにもあなたはレモンを待つていた  
 かなしく白くあかるい死の床で  
 わたしの手からとった二つのレモンを  
 あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ  
 トバアズいろの香気が立つ

その数滴の天のものなるレモンの汁は  
 ぱつとあなたの意識を正常にした  
 あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑う  
 わたしの手を握るあなたの力の健康さよ  
 あなたの咽喉に風はあるが

こういふ命の瀬戸ぎわに  
 智恵子はもとの智恵子となり  
 生涯の愛を一瞬にかたむけた  
 それからひと時

昔山嶺でしたような深呼吸を一つして  
 あなたの機関はそれなり止まった  
 写真の前に挿した桜の花かげに  
 すずしく光るレモンを今日も置こう

レモンが欲しくてたまわなかった  
 それぞれを少し強調  
 病気で寝たキリの人が、自分の手でそのとどろたことを確認  
 暗くなるなりのように(死を明らくとどろえりる感じ)



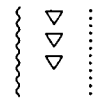
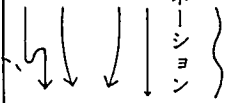
レモンが夢の意識を正常にしてくれたから、レモン  
 を神聖なものととしてとどろえりる。  
 一瞬というか速さを表したい

作者のうれしさ、  
 病気がなおらないとわかっていても、レモンをかじ  
 りた頭における健康そうな様子をみると、病気とは  
 思えないという複雑な気持ち。

智恵子の意識が正常になつた  
 ←  
 今までの突進をもう一度確認

妻の死を悲しむ

レモンに妻智恵子をしてのしでける様子

(一) 間	 <p>(句読点のないところで間をとる。) (読点のところの間三種。) (句点のところの間三種。) (段落と段落の間の間。) (場面や論理の転換を表現するための間。)</p>
(二) 強弱	 <p>強く読む。 だんだん強く読む。 だんだん弱く読む。 弱く読む。</p>
(三) 緩急	 <p>プロミネンス(強調する部分の傍に打つ)。 他の部分に比べて特に速く読む。 他の部分に比べて特にゆっくり読む。</p>
(四) イントネーション	 <p>平に読む。 下げて読む。 上げて読む。 変化させて読む。</p>

高橋俊三『群読の授業』明治図書 160P

朗読評価カード (3)組(30)番(大西摩耶)

朗読者( 神内 ) 作品名( 一つのメルヘン )

評価項目

- 1 声の大きさ、張り、イントネーションなど  
声の大きさはよい。
- 2 全体の調子、間、強弱、緩急など  
声がよく出るの。  
強弱が比較的のべた。
- 3 自分の読み方との比較
- 4 特に良かった点  
この所で、感じを込めたのよかったです。
- 5 こうすればもっとよくなる  
たは、早口で、ないう単語を、なくしていいと思う。

[資料5]

(F・G君)と(M・Yさん)の朗読を聴いた生徒の朗読評価カード比較

評価項目1 声の大きさ 張り、イン トネーシヨ ン	評価項目2 全体の調子、 緩急、間な ど	評価項目3 自分の読み との比較
[F・G君の場合]	<p>間の取りかたがうまい。 間の取りすぎ。 強弱のつけ方がうまい。 場面がかわったところでもうすこし間を取った方がよい。 緩急のつけ方がうまい。 バランスがよい。 全体的に淡々としている。 この詩にあっていた。 感じがでていた。 短く区切って朗読していたので、悲しい感じがでていた。 調子がよい。</p>	<p>私は全体的に明るくさわやかに読もうとしていたが、F君は「死」を表現していた。 あまり登んだような感じではなかった。 よく内容を理解し、感情がこもっていた。 自分のほうが強調が多い分弱く感じた。 強弱のつけ方が違った。 強弱や緩急がしつかりあらわれている。 文節ごとに間があつたのが違っていた。 「死の床で」の読み方、感じ方が違う。</p>
[M・Yさんの場合]	<p>間の取り方がうまい。 間をもう少し取った方がよい。 強弱のつけ方がうまい。 強弱がわかりにくい。 緩急のつけ方がうまい。 調子がよい。 全体的に速度が速い。 上がり調子で読んでいて少し変わった感じがした。 話しかけているようなかんじがした。 段落毎のまとまりがあつた。 調子がずっと一定だつた。 暗くなり過ぎていない調子がよかつた。</p>	<p>僕自身暗かつたが逆に明るさ、涼しさが感じられる。 明るく読んで哀しさを感じさせない。 淡々と哀しみにくれているような読み方ではなく、 明るいような気がした。 強弱がはつきり現れていた。 自分より速く読んでいた。 上げて読むところや下げて読むところが違う。 全体的に違う気がする。 同じ詩でも私とMさんは違うイメージを抱いたのかも しれない。</p>
<p>17名 3名 3名 6名 1名 1名 1名</p>	<p>12名 5名 11名 1名 5名 1名 2名 1名 1名 2名 1名</p>	<p>4名</p>
<p>3名 8名 6名 1名 1名 2名 1名</p>	<p>8名 1名 1名 1名 3名 1名 15名 1名 1名 1名 1名</p>	<p>3名 2名 3名</p>

評価項目5 こうすれば もつとよく なる	評価項目4 特によかつ た点
<p>もつと明るく読んだ方がよい。 もう少し全体的にゆっくり読んだほうがよい。 強弱をはっきりさせたほうがよい。 間の取り方ももつと工夫するとよい。 張りのある声で読むとよい。</p> <p>2名 2名 4名 3名 1名</p>	<p>気持ちがかもつていた。 心の底の悲しみが良く表現できていた点。 暗い感じ、悲しい感じがよくでていて、寂しい感じが伝わった。 少し暗い感じがあらわれていた。 詩の表面的でないような悲しさが感じられた。 哀しみが表れていた。 哀しさが表れていた。 寂しさの中に明るさがあるようなうまい読みをしていた。 強弱とかは特につけていないのに、間の取り方で言葉を強調しているところ。 間を取つた分情緒が感じられた。 「かすかに」のところの強弱のつけ方。 「かすかに」という言葉をとてども丁寧に読んでいるような気がして、大変印象に残つた。 「かすかに笑う」「あなたの器官はそれなりとまつた」のところが良い。 死んだところで声を小さくしていたところ。 「トパースいろ」の周辺。 さびしいところで弱くなつていくところ。 冒頭の読み方。 真剣さ、目。</p> <p>6名</p>
<p>もう少しゆっくり読んだほうがよい。 強弱をもつとつける。 もう少し大きな声で読むとよい。 もつと調子に変化をつける。 もつと感じを込めて読む。 はつきりと。 イントネーションで語尾が上がるのをなくす。</p> <p>10名 1名 5名 1名 1名 1名 1名</p>	<p>気持ちがかもつていた。 詩の内容が暗いにもかかわらず、明るい印象が感じられるように工夫されていた。 哀しい内容の詩だけれど明るい感じで読んだ点。 あまり暗くならなくて明るく聞けたのがよかった。 悲しいことなのに悲しさだけでないものがあらわれていてよかった。 生き生きとしていた。 詩の流れがよかった。 不思議な感じがした。 イントネーションの変化がよかった。 上がり気味のイントネーションのところに感情が込められていたところ。 間、強弱が盛んに使われている。 「ばつと」のところが雰囲気が出ていてうまかった。 緩急の差。 文末の「た」の発音の仕方がすばらしい、情景が浮かんでくる。 「変に明るい死の床」の表現がイメージされてなんともよかつた。 智恵子の意識が正常になつた様子がよく分かつた。 声をはつきりとしていて聞きやすかつた。 一定の速度で読み続けられたこと。 呼び掛けている部分。</p> <p>2名 2名 2名</p>